

ISSN 0910-2396

野鳥たより

—北海道—

第 108 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成9年6月21日

イ ス カ



1997. 1. 12 苫小牧・北大演習林

撮影者 高橋 浩 幸

〒066 千歳市北栄1-25-7



もくじ

私の探鳥地 (33) 北海道大学苫小牧演習林

木村 与吉	2
続 豊平川バードウォッチング	3
平成8年度総会報告	8
三角山の野鳥観察の記録	10
ベニバラウソ観察記	13
探鳥会ほうこく	14
中国におけるトキの保護事情の紹介	17
探鳥会あんない	18

私の探鳥地 (33)

北海道大学苫小牧演習林

木村 与吉

明治37年に創設された北海道大学苫小牧演習林は、私の大好きな自然観察の場所である。清らかな幌内川の流れと、緑がいっぱいの樹林にあふれ、野鳥も多く四季折々に種類の変化が見られる楽しみのあるところである。

位置は苫小牧市高台にあり、JR苫小牧駅から北へ6キロ、総面積は2,700ヘクタール、地質は支笏湖火山群の噴出物に蔽われている。地形は概して平坦である。
[註] 交通機関は苫小牧市営バスターミナルから(22)演習林ゆき。所要時間約25分。札幌市内からは車で1時間30分ぐらいの距離程である。

こうした地域の上には、広葉樹林が広がっており、森林形態上からは温帯北部樹林に属しているがここではブナは見られない。こうした天然林のほかにトドマツ、カラマツなどの研究用の人工造林地、防火線や高圧送電鉄塔下の伐開地に川や湿地がある。林床にはシダ類が多く、ササ類は少ない。

このような環境から野鳥類の数も多く、演習林サイドの調査研究などによれば、夏期(6~7月)では52種。そのうち留鳥が20種、夏鳥が32種となっている。

冬期(11月~3月)の調査では43種で、留鳥、漂鳥とみなされるものを除く11種が冬鳥と考えられた。

[註] 参考文献: 北大農学部演習林研究報告(29-1、30-1)



ミヤマホオジロ

最近の演習林内でクマガエラが見られなくなったのは寂しいが、今年2月に野鳥観察に行ったときのメモをご披露したい。

植木園入口(標識)左手の池 ホオジロガモ、マガモ
駐車場-林内へ シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ、アカゲラ、ツグミ

餌台 ミヤマホオジロ、ヤマガラ、ハシブトガラ
木々の下-雪の上 カシラダカ、ミヤマホオジロ
木々の上 シメ、ヒヨドリ、カケス(声)、ドラミング聞こゆ。



観測塔へ エナガ

林道→エナガ、ハシブトガラ、ゴジュウカラ
同右方向 アカゲラ、ミヤマホオジロ(♀、♂)、もう一つのドラミング。オオアカゲラと確認。

餌台まで戻り ミヤマホオジロ、トビ、ヤマゲラー久し振りに会った! オオタカ-カラス2羽がまわりついている。ハイタカ

構内の池(庁舎西側) 氷の上にセグロセキレイ。アメリカヒドリ、オナガガモ、マガモ、ヒドリガモ、ホオジロガモ(岸辺のアシのなか) ミヤマホオジロ、ヒヨドリ

アメリカヒドリとミヤマホオジロに出会えて感激した。最後に、ここは研究施設であるため、植物、昆虫、魚などの採集は禁じられていることを付記しておきます。

〒066 千歳市稲穂3-14-9

続 豊平川バードウォッチング

— 札幌市中心部の一 —

戸 津 高 保

「野鳥だより94号」で、報告した豊平川バードウォッチングの続編である。94号で書いたように、私の勤める札幌商高校の理科の授業で、身近な所にどんな鳥がいるのかを生徒達に見てもらおうと思い、バードウォッチング授業を昭和63年の6月から始めた。この観察は毎年6月に行かない、9年間続けたことになる。生徒達と学校から歩いて豊平川に行き、南9条橋と幌平橋の間で鳥を観察する。

そこで確認された鳥について、豊平川における季節変化を調べてみたいと思い、豊平川バードウォッチングを平成2年6月から始めた。一年を通じての鳥の観察で、現在まで7年間近く継続している。

豊平川右岸のサイクリングロードを双眼鏡を持って自転車で走りながら、鳥の姿や声を確認し、記録している。区域は南9条橋を起点として、上流はミュンヘン大橋から、下流はJR苗穂鉄橋までである。

スズメ・カラスにハトぐらいしか見られないのではと思っていた札幌市中心部の豊平川で、バードウォッチング授業9年間で23種(図1)、豊平川バードウォッチングの約7年間で51種(spを含む)の鳥を記録した(図2)。続けるに従って、色々興味のある問題や疑問が出てくるので、このウォッチングは、今後も当分続きそうである。

今回は、「野鳥だより94号」から継続した観察記録を含めた報告となる。観察方法、場所、時間は前回とほぼ同じである。ただ観察した鳥の記録は、前回と違って、毎月2回の観察で現れた鳥の合計種類数で表している。なお図2の△印は鳥の種類がはっきり確認できなかったものである。また平成6年の8・9月は都合により、観察を中断した。

月毎の観察種類は、4・5月が最も多く、1・2月が最も少ない傾向がある(図3)。前回でも書いたのだが、マガモの相当数がすっかり札幌っ子として一年中豊平川で見られる。平成5年から8年にかけて、真っ白いカモが豊平橋付近の豊平川から中島公園にかけて1羽観察されている。この事は鳥仲間の話題となった。この白いカモは、アヒルが野生化して、カモの群れにまぎれこんだものか、マガモあるいはカルガモのアルビノかという疑問であった。

平成6年の春から夏にかけて、私も何回か中島公園の池や、その近くの豊平川でこの鳥を観察した。一度豊平川の水面近くを真っ白い鳥が飛んでいたのが、一瞬何だ

ろうとおどろいたことがある。この白いカモは、豊平橋近くの豊平川でカルガモと一緒に餌を取っていたり、次の時にはマガモと並んで泳いでいたりした。大きさはマガモやカルガモと同じであり、マガモと同じように飛ぶのでアヒルではないであろう。アヒルは、この両種より大きいというのが私の印象である。そうするとマガモかカルガモのアルビノということになる。

図1 バードウォッチング授業

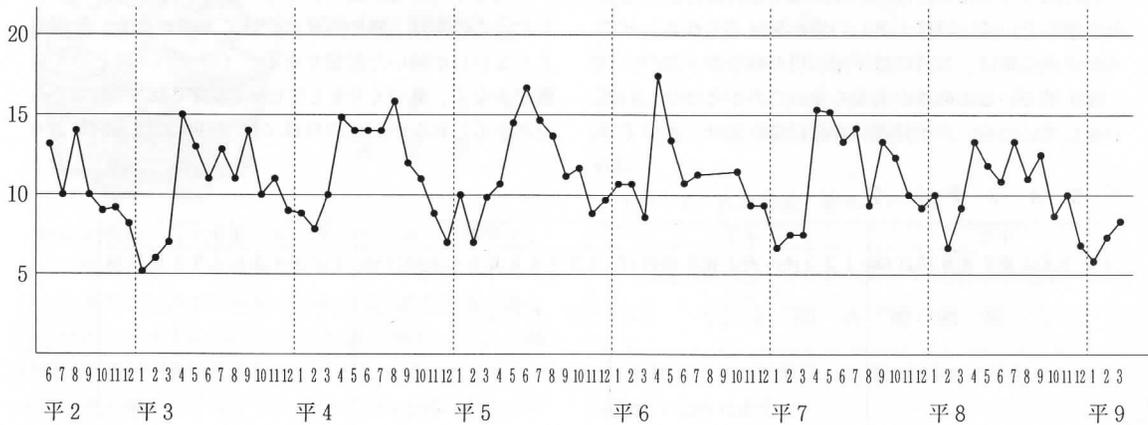
南9条橋～幌平橋

	63	平1	平2	平3	平4	平5	平6	平7	平8
トビ			○	○					○
チゴハヤブサ						○			
マガモ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(アルビノ)									○
コチドリ									○
イソシギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
キジバト									○
アマツバメ	○				○				
ヒバリ	○	○	○	○	○	○		○	○
イワツバメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハクセキレイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヒヨドリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
モズ	○								
コヨシキリ	○	○							
コメボソムシクイ	○			○	○				
センダイムシクイ				○					
シジュウカラ			○					○	
アオジ	○	○							
カワラヒワ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
スズメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ムクドリ	○	○	○		○	○	○	○	○
ハシボソガラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハシブトガラス		○		○	○	○	○	○	○
ドバト	○	○	○	○	○	○	○	○	○

平成6年3月の雪どけ前に、中島公園の池のわずかに氷が開いた所で、この白いカモがマガモと一緒にやすんでいて、この時カルガモは全く見られなかった。おそらく冬中この辺にいたのではないと思われる。そしてクチバシにカルガモの特徴がないことから、結論として、このカモはマガモのアルビノと考えられるが、どうだろうか。

平成7年のバードウォッチング授業で、この白いカモが、川原で観察中の私や生徒達の前を、高く低く2度飛

図3 豊平川ウォッチング 月毎観察種類数



少ない感じがした。平成8年は夏鳥の渡りの遅れがイワツバメだけではなく、キビタキなどでも感じられた年であった。

イソシギは、ヒバリと共に、豊平川に春を感じさせてくれる鳥である。6月初旬頃には、2羽のイソシギが向きあい、羽を広げたりとじたりするディスプレイとおもわれる行動や2羽が水面すれすれを追いかけあう行動を見せてくれる。この鳥は毎年4月にきまって豊平川に姿を見せ、にぎやかな鳴き声を聞かせてくれる。

平成7年には、チゴハヤブサが例年になく、何回も記録された。この鳥は日本では、青森北部と北海道でのみ繁殖し、数は少ない。

私の勤めている札商高校の校舎やグラウンドの上を、今年はいくよくよく飛ぶなと思っていたら、グラウンド脇の木に巣づくりをして、4羽のヒナを巣立ちさせたのであった。

巣づくりをした木のすぐ近くに住む友人と話したら、チゴハヤブサのことを良く知っていた。

この年チゴハヤブサは、5月末にカラスが使っていた巣からカラスを追い払って、その巣で繁殖したそうである。5羽のヒナがふ化した。6月末に1羽が巣から落ちて死に、4羽が無事に巣立ったという話であった。

私の同僚が人けのない学校のグラウンドで何度か砂あびをしているチゴハヤブサを見たそうである。

私は9月始めに、チゴハヤブサの親と4羽の幼鳥の計6羽が、巣の上空を丁度幼鳥の飛行訓練の仕上げをしているムードで、次々と何度も飛ぶのを見た。カラスがその近くに来ると親鳥が猛然とカラスを追いかけ、追い払った。次の日からこの一家は、巣の付近から姿を消した。渡りの移動を始めたのだろうかー。

普段は天敵もなく、大きな顔をしているように見えるカラスが、小型のチゴハヤブサに追われて逃げているのを見た時、思わずニッコリしてしまった。

この巣づくりをした、学校グラウンド横の木から豊平川までは、ひと飛びの距離であり、この年、豊平川ウォッチングで数多く観察されたチゴハヤブサには、この巣のペアが含まれていたと思われる。

平成8年もチゴハヤブサが同じ木で巣づくりするのを期待していたが、残念ながら巣づくりをしなかった。

平成7年の2月と平成8年の1月、オジロワシが東橋付近の豊平川に現われて、テレビや新聞のニュースで報道された。私が観察している区域の豊平川に2年連続してオジロワシが現われたと思っていたら、平成9年の2月に、オジロワシが豊平川上空を飛んでいるのを私も確認した。3年連続の出現である。オジロワシはぜひ、このウォッチング中に記録したいと考えている。

平成8年の3月、幌平橋の少し下流をオオタカのパークがゆったりと中島公園方向に飛んだ。これは、約7年間の豊平川ウォッチングで唯一度のオオタカの記録である。夏にはウミネコが予想外に、私の観察区域の豊平川に現われるのだが、平成7年から、大型のカモメの仲間であるオオセグロカモメが4月に始めて確認され、その後も8月から11月にかけて、何度も豊平川に姿を現わした。このオオセグロカモメの出現は平成8年も同じ傾向が続いている。この事は何が原因なのだろうか。興味のある所である。

平成8年の11月、修学旅行で京都に行った時、同僚と保津川を川船（亀岡から嵐山の渡月橋まで）で下った。正味1時間半の乗りごたえのある川下りで、渓谷を下る船から、清流の鳥や森の鳥が次々と観察できて、楽しい思いをした。保津川の川下りでもおもしろいなと思ったのは、セグロセキレイが上流から下流の嵐山まで、数多く見られた事である。この間ハクセキレイは全く見られなかった。

豊平川で私が観察している区域では、ハクセキレイは、

ほぼ一年中かなりの数で見られるのだが、セグロセキレイは確認していない。豊平川では、観察区域より上流部でも、私はセグロセキレイを見た記憶がない。この保津川の状態が本州の川では一般的な現象なのか、ハクセキレイとの関係を含めて疑問が残った。

資料を読んでみると、もともと北海道にはセグロセキレイがいて、後からサハリン経由でハクセキレイが北海道に入ってきたようである。豊平川でも、かつてはセグロセキレイが多くいたのだろうか。そして新しく侵入してきたハクセキレイがセグロセキレイを追い払って、豊平川にも分布を広げてきたのだろうか。

また、もともとセグロセキレイは、北海道ではごく数の少ない種類だったのか？という疑問も感じられた。

豊平川におけるハクセキレイとセグロセキレイの分布やその歴史についてくわしい方がいたらぜひ話を聞きたいと思っている。

コメボソムシクイ、コヨシキリ、ベニマシコなども豊平川ウォッチングで記録されたが、これらは渡りの移動途中に、立ち寄ったものであろう。

冬鳥のカワアイサは、毎年この区域の豊平川に姿を見せ、この所やや数が増えているかなという印象がある。11月から翌年の4月まで、ここにどまるので、餌になる魚は充分いるのだろう。平成7年の11月には、15羽程度の群れを2つ観察した。

カムバックサーモン運動以来、豊平川に毎年サケがもどってきており、私の観察している区域内でも、あちこちでサケの産卵行動が見られる。カワアイサが豊平川で見られるようになったのは、サケのそ上と関係があるのかもしれない。カワアイサはサケを含め、魚の卵を好んで食べるようで、札幌市中心部の豊平川も少しづつ魚類相が豊かになってきているのかなと思う。

平成7年の2月を境に、私の観察している豊平川のほぼ全域にわたって、河畔林が2メートル程の高さで切れ、がっかりしてしまった。この河畔林は野鳥の寝ぐらや、かくれ場所として充分な程に成長してきて、良い環境になってきたと思っていた矢先であった。なぜこのような伐採を行なったのか、私には理解できなかった。

この伐採の結果、平成5年の6月に初めてこの河畔林で声を聞いたコメボソムシクイは、この後現われていないし、数が増えてきたと思ったアオジやシジュウカラもこの年はぐっと数が少なくなった。この年のイワツバメの一月遅れの出現も、伐採と関係があったのでは…と思う。

私の観察区域の外側になるが、豊平川にわずかに残っていた成長した河畔林（北環状大橋のやや下流）も工事のため一部が伐採され、小さくなってしまった。

平成8年1月に、豊平川の自然を守り、より自然豊か

な豊平川をとりもどそうという市民運動「豊平川ウォッチャーズ」が旗揚げした。

私も「野鳥だより94号」でふれたが、本当に情けない程、樹木の縁が少ない豊平川に「森の回廊」をよみがえらせたいという夢をもっている。「豊平川ウォッチャーズ」の活動に期待すると共に、私も出来る限りこの運動に協力していきたいと考えている。

〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1-14

参考写真（編集部）



イソシギ



ヒバリ



セグロセキレイ

平成 8 年度 総会 報告

日 時：平成 9 年 4 月 19 日（土）午後 2 時～ 4 時 30 分
場 所：札幌市民会館 第 7 号会議室

柳澤会長の挨拶のあと、議長に小堀焯治氏を選出し、議案審議が行われ原案どおり承認可決されました。

<議 事>

1. 平成 8 年度事業報告

[総 務]

(1) 野鳥写真展の開催

- ・ たくぎん自動サービスフロア（8.5.8(水)～ 27(月)）
- ・ たくぎん西支店ロビー（8.5.29(水)～ 6.24(月)）
- ・ ほくでんエレナードギャラリー
（8.6.26(水)～ 7. 2(日)）

(2) 野鳥だよりの発送（104号～107号）

(3) 新年講演会、スライド映写会 9.1.11(土)

講 師 小杉和樹氏「利尻の博物誌」

於：札幌市女性センター

スライド発表者 5 名 参加者 71 名

(4) 愛護会名入りカレンダーの作製 100部

(5) 定例幹事会の開催（毎月 1 回、12回）

(6) 障害保険の更新（探鳥会 20 回分）

[広 報]

野鳥だより 104、105、106 及び 107 号の発行

[探 鳥]

別紙の通り（掲載略）

探鳥会 20 回、参加者累計 692 名、記録種数累計 576 種。

野幌森林公園を歩きましょうー開催 8 回、参加者累計 192 名

[会 計]

(1) 平成 8 年度決算報告

(2) 平成 8 年度会計監査報告 大野信明監事の監査報告書を白澤代表幹事が代って報告。

2. 平成 9 年度事業計画

[総 務]

(1) 新年講演会（平成 10 年 1 月中）

(2) 野鳥写真展

カメラの光映堂フォトギャラリー「ウエストフォー」

平成 8 年度 決算書

(収入の部)

区 分	決算額(A)	予算額(B)	増 減 (A-B)	摘 要
繰越金	38,368	38,368	0	
個人費	892,000	740,000	152,000	平成 9 年度以降の前受分を含む
家族費	56,000	60,000	△ 4,000	
団 体 費	0	10,000	△ 10,000	5,000円× 2 団体
寄付金	10,810	10,000	810	斉藤氏ほか
参加費	58,500	55,000	3,500	新年会講演、藤の沢探鳥会参加費ほか
売上金	107,972	180,000	△ 72,028	野鳥だより(180,000円)、カレンダーほか
雑収入	1,007	6,632	△ 5,625	利息
合 計	1,164,657	1,100,000	64,657	

(支出の部)

区 分	決算額(A)	予算額(B)	増 減 (A-B)	摘 要
印刷費	469,062	550,000	△ 80,938	野鳥だより(4 回発行)
通信費	154,040	200,000	△ 45,960	だより発送費ほか
会議費	52,000	80,000	△ 28,000	幹事会等の会議室使用料
消 耗 費	35,215	40,000	△ 4,785	封筒代ほか
交通費	60,500	70,000	△ 9,500	だより発送、探鳥の交通費
報償費	72,000	90,000	△ 18,000	事務所、講師謝礼ほか
雑 費	62,0320	70,000	△ 7,968	障害保険、写真展ほか
予備費	0	0		
合 計	904,849	1,100,000	△195,151	

(収支の部)

(収入) (支出) (残高)
1,164,657 - 904,849 = 259,808

内訳 会費仮受分 152,000 (76 件)
繰越金 107,808

開催期間9.4.28(火)～5.15(木)

- (3) 野鳥だよりの発送 (108号～111号)
- (4) 定例幹事会の開催 (原則として毎月第1水曜日)
- (5) 愛護会名入りカレンダーの作製
- (6) 障害保険の更新

[広報]

野鳥だより108、109、110及び111号の発行

[探鳥]

探鳥会20回

野幌森林公園を歩きましょう8回

「探鳥会予定表」はすでに発送済みのため略す。

[会計]

- (1) 平成9年度予算(案)

[その他]

小堀議長が柳澤会長の挨拶を敷衍したかたちで発言。「近年の自然保護思想の普及により、自然保護運動に関わる道や各種団体からの協力要請や呼びかけに対して、愛護会として事業目的で言及しているものの、必ずしも明確な答えを出していない。会としてこの辺の

ところを考えてゆくことが必要であり、本年度は会員各層の意見を聞きながら幹事会として論議していきたい。また、その結論をまっぴら平成10年度には役員改選も含め刷新していきたい。」

出席各会員の活発な発言があり、議長提案は承認された。

[役員人事]

小堀議長の提案承認に基づき、平成9年度の役員人事は原則留任された。

佐々木武巳監事が退任され、村野紀雄氏が新任された。新たに後藤義民氏が探鳥幹事に、樋口孝城氏が広報幹事に就任された。渡辺紀久雄氏に替わり、中正憲信氏が総務幹事代表に選出された。

※会員数

項目	7. 4. 1	8. 4. 1	9. 4. 1
個人会員数	410名	370名	370名
家族会員数	—	20家族	20家族
団体会員数	2団体	2団体	1団体

平成9年度予算書

(収入の部)

項目	前年度 予算額	予算額	摘要
繰越金	38,368	107,808	会費仮受分は個人会費に計上
個人会費	740,000	740,000	2,000×370人
家族会員	60,000	60,000	3,000×20家族
団体会費	10,000	5,000	5,000×1団体(猟友会)
寄付金	10,000	10,000	
参加費	55,000	55,000	新年講演会 藤の沢探鳥会ほか
売上金	180,000	180,000	野鳥だより、カレンダー
雑収入	6,632	2,192	利息ほか
合計	1,100,000	1,160,000	

(支出の部)

項目	前年度 予算額	予算額	摘要
印刷費	550,000	570,000	野鳥だより
通信費	200,000	200,000	だより発送費ほか
会議費	80,000	80,000	会館使用料・幹事会ほか
消耗品費	40,000	40,000	コピー、事務用品
交通費	70,000	70,000	野鳥だより発送、探鳥会幹事用等
報償費	90,000	90,000	事務所、講師謝礼ほか
雑費	70,000	70,000	傷害保険、写真展ほか
予備費	0	40,000	
合計	1,100,000	1,160,000	

◆会費の納入についてお願い

平成9年度分の会費の納入につきましては、同封の納入状況をご参照のうえ、ご面倒でも郵便振替用紙により、お振り込み下さるようお願いいたします。

また、平成8年度またはそれ以前の会費未納の方は、併せてお振り込み下さるようお願いいたします。

郵便振替口座 02710-5-18287

◆家族会員名簿を連名制に

平成8年度から家族会員制を実施してまいりましたが、この度家族会員の名簿原簿を連名で表記することになりました。野鳥だよりの発送用ラベル、会費などの連絡はこの連名制を基に行います。なお、家族会員加入ご希望の方は霜材耕一幹事までハガキでご連絡ください。

〒065 東区北16条東6丁目2-9 ラポール美香保601

三角山の野鳥観察の記録

早瀬 広司・富

'96年5月上旬のある日、三角山の林道で知人に会った際に「三角山の野鳥の記録をまとめてみてくれませんか。」と依頼された。

たしかに'81年からこの三角山で野鳥を観察し、その名を記録してきたが、初めからこれを取りまとめて発表しようという意図がなく、日・時などを決めて調査したものではない。従って、いわば私の任意の観察記録であるが、この機会に三角山の野鳥観察記録としてまとめてみた。

まず、'81年7月から'96年8月までの間（但し'85年の1年間を除く）の記録を総括してみた。（第一表）

4月下旬から5月下旬にかけては夏鳥の渡来の季節になるので、早朝5時前後から7時過ぎごろまで見て歩き、勢い観察する回数も他の季節にくらべて圧倒的に多くなる。

コースは北側の山の手入口（札幌緑花会緑ヶ丘療育園）から一の坂、二の坂を登って中腹に達し、山を半周するかたちで下段の林道を南の方（宮の森）に行って、来た林道に戻る。しかし、冬の間は中腹から南周する林道は雪に埋まるために行かないことが多い。その代りに北の麓にある齋藤リング園の餌台と、その北側の川沿いの林が主な観察ルートとなる。

三角山で観察し、記録した野鳥の数はこれまでで約70種となりこれを第二表にまとめた。

三角山の留鳥で最も多く見られるのはヒヨドリで、カラ類ではシジュウカラとハシブトガラが多い。次いでゴジュウカラ、ヤマガラである。キツツキ類ではアカゲラ、次いでコゲラがよく見られた。

コウライキジは'94年からその声を聞くことがなくなった。が一方、エゾライチョウは'94年から林道そばの草

むらで見られるようになった。

雪融けの4月からはカラ類の囀りが賑やかになり、キツツキの仲間たちは枯れ木をつついて強い反響音のドラミングを始める。

夏鳥たちの渡来の当初は林道のうえとか、そばの樹林の枝にじっと止まっているのでゆっくりと見ることがができる。ヤブサメ、ルリビタキ、アオジ、キビタキの小型の鳥たちばかりではなく、森の歌い手のアカハラ、トラツグミやクロツグミなど中型の鳥たちもいる。

ルリ色をしたルリビタキ、オオルリ、コルリが順次渡ってきて美しく囀る姿を間近かに見せてくれる。特にルリ色をしたオスたちを見るのが楽しい。

ツツドリやジュウイチなどの野鳥も林道そばの木の枝に止っていて、近づくと林道沿いに遠くの木へと移動した。

このように身近かに野鳥を観察できるのは、恐らく野幌森林公園などでは味わうことのできないことだと思う。なぜならば、野幌は自然林で巨大な樹木があるのに比べて、三角山は木々が低い二次林であるため囀る野鳥たちまでの距離が近く観察し易いからである。南面の採石場跡地への登り口の道路に、早春まだオオイトドリの葉が萌えてないころ、渡り始めのアカハラ、北へ帰るツグミの群れがよく見られた。林縁ではホオジロ、モズなどの囀りが聞かれる。

6月になり気温が上昇しエゾハルゼミが鳴き出すころには、若葉が一斉に展開して野鳥を探しにくくなる。また、野鳥も営巣してあまり囀らぬようになるので、三角山の探鳥は自然と遠のくようになる。

秋の気配が深まるとカケスがよく見られ、あのダミ声も聞かれるようになる。ツグミの群れも北から渡って来、

第一表 三角山で月別に野鳥名を記録した年数と回数

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
記 録	年数	12	12	10	14	12	13	12	10	12	9	12	10
	回数	42	40	33	89	173	37	29	27	29	37	28	24
野鳥種数	25	29	26	49	56	36	32	29	25	30	22	23	

期 間 1981年7月～1996年8月
(1985年1年間の記録なし)

野鳥種数にスズメ、ハシブトガラス、ハシボソガラスの3種は含めない。

ジュリリ……と比較的にごった感じの低い声。注意して探すと、顔は純白の雪ダルマに目と口をつけたようなシマエナガが動きに従って木々の枝をゆする。

冬のコースで個々にヒヨドリ、アカゲラ、コゲラ、カラ類が見られる。しかし、カラ類の混群に出会うチャンスは少ない。観察は勢い齋藤リンゴ園に設置された餌台、ボトル、脂にく、リンゴに集中する。ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、スズメ、アカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、カケス等が見られる。

脂にくには円山動物園ではヤマゲラが見られるのに、ここではまだ見えていない。リンゴ園の餌台と川沿いの林との間を野鳥たちが頻りに行き来するのが見られ、時には川の中でヒヨドリやカラ類が水浴びをする姿も見られる。また、川の土堤や近くの灌木でミソサザイも見られた。

クマゲラは冬期、採餌のために三角山に来るようだ。

'97年2月28日14時に齋藤リンゴ園の北向いの川沿いの林の中で見ている。('92年1月4日12時、円山の登山道から20m離れたカツラの大きな枯木を一所懸命についで採餌していた)。

'97年2月19日の14時、この坂沿いの林道より3m入ったカラマツの根元に3ヶ所大きな採餌跡を発見した。そこで出会った3人の登山者からの話では、実際にクマゲラが採餌している現場に出会わせていたという。'96年12月に1回、'97年2月10日前の2回だったとのこと。また、齋藤リンゴ園主がリンゴの剪定中の2月中旬の午後に2回、3月上旬に1回クマゲラを見ているとのことであった。

2月下旬、日が長くなるとともにゴジュウカラがフィフィと高らかに歌声をあげる。三角山に春のおとずれが、近いことを告げてくれる。

〒063 札幌市西区山の手2条3丁目5-9

第二表

三角山で観察された野鳥

[表の見方] 野鳥を観察、記録した数は約70種で、観察記録の頻度によって、よく見られる(70%以上:—) 普通に見られる(30~70%:—)と稀に見られる(30%以下:.....)に分けて表示した。

第一表と同様、スズメ、ハシブトガラス及びハシボソガラスの3種は含まない。

科	種	月 別											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ワシタカ	トビ
	ハイタカ
キジ	エゾライチョウ
	コウライキジ
シギ	ヤマシギ
	キジバト
アオバト	アオバト
	ジュウイチ
ホトトギス	カッコウ
	ツツドリ
	ヤマゲラ
クマゲラ	クマゲラ
	オオアカゲラ
	アカゲラ
	コゲラ
ツバメ	イワツバメ
	キセキレイ
セキレイ	ハクセキレイ
	ビンズイ
	ヒヨドリ
モズ	モズ	
ミソサザイ	ミソサザイ	

ベニバラウソ観察記

山田良造

カムチャッカ半島やアラスカに生息し、日本には冬鳥として稀に渡来するウソの亜種ベニバラウソが、札幌市中央区円山公園で観察されたその記録である。

1997年1月12日、日本野鳥の会札幌支部円山公園定例採鳥会でベニバラウソが観察された。支部報カッコウ2月号に「赤い腹と尾羽外側の白が印象的だった。」と記されている。

2月9日、日本野鳥の会札幌支部円山公園定例採鳥会で、再び観察され、多くのバードウォッチャーの話題となった。私もその1人で、翌日からこの鳥を見に何回か円山公園に通った。

梅林碑のある梅林に番で飛来し、梅の花芽をボリボリ音をたてて採餌していた。この公園は桜の名所であり桜林もあるのに、もっぱらこの梅林で観察された。

この梅林にはウソ^{つがい}♀、ウソの亜種アカウソ♂も飛来し、このウソの亜種ベニバラウソを加えた3種を比較しながらの観察であった。

ベニバラウソは飛来しない日もあって心配したが、北海道神宮拝殿南側（土俵のある裏手）の梅林で採餌していた。先に記した梅林碑のある梅林とこの2箇所が主たる採餌場所とわかった。

3月13日を最後に、この鳥の姿は観察されていない。この頃、神宮警備員がハヤブサ（ハイタカがときどき現われて、襲っていたことからハイタカと思う）に追われているを目撃しており、捕食されたと思うと話していた。しかし、春めいてきたことから繁殖地のカムチャッカ半島に帰ったのではとの話も出て、この鳥の話題は尽きなかった。

今年はベニバラウソ飛来の情報はこのほかにもあった。観察地域に住む方の情報であるが、1月23日、2月中旬、2月20日、4月4日の数回、札幌市豊平区平岸天神山緑地梅林に♂1羽飛来し、梅の花芽を採餌していた（4月4日最後に見たときは桜の花芽を採餌していた）。

2月14日、円山公園でこの鳥と一緒に観察していたバードウォッチャーは、山梨、長野県にまたがる八ヶ岳山麓にベニバラウソが飛来し、動物写真家が観察していることを話していた。

ベニバラウソについては野鳥図鑑等でも承知されていると思うが、アトリ科ウソの亜種で、全長は個体差もあり16.5cmから17cmで、ウソ（15.5cm）より少し大形である。♂は胸から腹にかけて鮮やかな朱色で、実に美しい鳥だ。♀の翼に目立つ白帯がある。体はウソの灰褐色

に比して色が薄く感じた。尾羽の下面両側に細長い白色斑がある（写真♀の尾羽参照）。しかし尾羽の下面にあるため、野外識別は条件がよくないとできない。鳴声はウソに似ていて、ヒーヒーホー、ヒヨヒヨと口笛に似た優しく低い声でした。

この鳥の記録は、本州・北海道で少数記録されているが、1991年10月30日、天売島で千歳市若草2丁目18-5 遠藤茂・幸子氏夫妻が、写真撮影された記録を、北海道野鳥だより88号で私が紹介している。

反省点として、野鳥誌にも載っていたことですが、週休2日制が普及して、時間に余裕ができた人が増えた、さらに、高価なオートフォーカスのカメラを手にする人がめずらしくなくなり、足りないものは情報だけということである。野鳥観察は自分のフィールドで行なうのが一番良いのですが、珍鳥の観察となると、その情報が広がって今回のように多くの人が集まるのは無理のないことだ。特に撮影となると私を含めて、守るべきマナーがあることを忘れてはいけないと思う。このかけがえのない自然の友達を、われわれの手によって、種の絶滅につながるないように、守ってやりたいものだ。

<参考文献>

日本産鳥類図鑑（東海大学出版会）、日本鳥類大図鑑（清棲幸保）、フィールドガイド日本の野鳥（高野伸二）、鳥630図鑑（日本鳥類保護連盟）等参照。

〒003 札幌市白石区栄通16丁目4-13



ベニバラウソ（メス）



円山公園探鳥会

9. 3. 2

吉田晶子

昨年の晩秋、円山公園に桂の葉の甘い香りが漂う頃、初めて探鳥会なるものに参加しました。双眼鏡を覗くとそこは見たことのない世界で一杯です。幹を逆さに降りる「ゴジュウカラ」、レンジャクの糞に混じっていた種が樹上に落ちて発芽するという「ヤドリギ」。大声でヒーヨーヒーヨーと鳴く「ヒヨドリ」。時々、木の向こうからこっちを見つめる「エゾリス」と目が合ったような気がしてどきっとしたり、すっかり鳥・自然との出会いの楽しさのとりこになってしまいました。それからというもの、週末には各地の観察会などに出掛ける生活へと一変です。寒がりな私が、よくやるもんだと自分でも感心する程、以外な展開です。

会に行くと、ふと、素敵な人達やおもしろい話にも出会います。

仲良くご夫婦・親子で来ていたり、先生が生徒を連れてきていて、その生徒さんが鳥博士のように詳しく、「今どきの小学生にもこういう子がいるんだ。」と驚いたりします。そして、今日、ちょっと素敵な話を耳にしました。会員同士らしい二人がお話しています。一人は、土木か河川工事関係の仕事をされている方ようです。「鳥や自然のこと、ちゃんと知っておかないと、良い物は作れませんから。鳥のことを考えた川、魚がのぼってこれる川、ダム……。」工事する側の人々の中に、こんなにきちんと周囲の自然のことを気にしている人がいたなんて、嬉しかったです。きっとその人自身も、鳥が好き、自然が好きでこうして休日にも出掛けてきているのかなと思ひ、とてもすがすがしい気持ちになりました。

鳥を見つけに行った後の月曜の朝、私はとても元気です。好きな事をしたという満足感、また来週、見に行こうという期待、だからまた一週間、一生懸命働こうという気持ちになります。そして、まだ見ぬ春、夏、秋の鳥達、樹々に早く会いたいと、今から楽しみにしています。
〒001 札幌市北区北29条西4丁目2-527

〔記録された鳥〕ハイタカ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、カワラヒワ、シメ、ウソ（ウソ・ベニバラウソ）スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上20種

〔参加者〕野口正男・キヨ、坂元直人、新城 久、柳沢信雄、串崎、秋田和子、佐々木泰夫、今村三枝子、津原巴里、山田良造、山田甚一・玲子、野坂英三、白澤昌彦、樋口孝城、武沢和義・佐知子、吉田晶子、須田節、丹羽みさえ、中川千代、中川三重子、平岡利弘・典子、野崎莞二、太田 亮、高橋利道、蓮池悦子、井上公雄 以上30名

〔担当幹事〕武沢和義、野坂英三

風雨のウトナイ探鳥会

9. 3. 30 寺尾勝廣

4月間近のこの時期は、道端の何を見ても冬から春への息吹きを感じます。

私の『散策の虫』もうづきだしたそんなある日、友人からウトナイ湖での探鳥会に参加してみないか？との電話があり、「待ってました！」とばかりに飛びつきました。ところが、テレビから聞こえてきたのは、<3月30日は気圧の谷が接近し…午前中は風雨が強くなり、午後は風雪の強くなることが多いでしょう。>「ガーン！」最悪の予報。とはいえ早朝、霧雨の中を一路ウトナイ湖を目指して出発しました。

到着すると既に5、6名の方が寒風をものともせず双眼鏡や本格的なスコープで対岸を観察し、数名の観光客がカモやハクチョウとロードオートを片手に戯れていました。湖畔の風を甘くみていた私たちは、バタバタとトランクから軍手を引っ張り出し、なんとか防寒できました。

— 9:40 探鳥会開始 —

カモやハクチョウのアップ！なんて愛らしいつぶらな瞳なんだろう。なんと美しい羽の紋様なのだろう。寒さを忘れ感動のスタートとなりました。初心者ともいえる私たちは小さな双眼鏡で参加していましたが、高倍率のスコープを覗かしてもらい更なる感動に包まれました。そして、カモの種類や見分けかたのポイントを教えてくださいました。非常に分かりやすいのですが、対岸近くを泳ぐカモの種類についてはうねりもあるからか非常にわかりづらく、『さすがプロフェッショナル』という感ででした。時の経つのを忘れそうでしたが、寒さが身に染みてきたこともあって、湖岸をネイチャーセンターに向いながら次のポイントに期待を寄せつつ移動を始めました。ところが、天気予報がはずれる時代は終わりを告げたようで、予報どおり『雨』しかも『大粒！』。みんな観察もそうそうにネイチャーセンターに逃げこみました。その後、センターから観察したのですが、すばらしい映像が目飛び込んできました。まるで、初秋の海岸線に並ぶ釣竿のごとく林立するアオサギの群れ！。強風

のためか背中を丸めてなんとなく前傾姿勢をとっているオオワシの幼鳥！まさに感動の嵐の楽しい一日でした。

今回、案内して下さった野鳥愛護会の皆さん、どうもありがとうございました。そして、これほどの動物が息できるウトナイ湖周辺の環境に感謝するとともに、守っていききたいと思います。

〒051 室蘭市新富町1丁目2-23

〔記録された鳥〕ウミウ、アオサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒドリガモ、ヨシガモ、コガモ、マガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、カモメ、シロカモメ、キジバト、ハクセキレイ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、シメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上32種

〔参加者〕中正憲信・弘子、樋口孝城・陽子、木村与吉、寺尾勝廣、吉田晶子、栗林宏三、井上公雄 以上9名

〔担当幹事〕井上公雄、栗林宏三

野幌森林公園

— 探鳥会に参加して —

9. 4. 13 亀田悦子

毎日を忙しく過ごしていると季節の移りかわりさえ気づかなくなってしまう。しかし、時折目覚めに小鳥のさえずりを聞き心まかせていました。

今回、自然の中を歩きながら身近な生物を観察できること、何より愛護会のガイドがあるので楽しみに参加してみました。

当日は肌寒い日でしたが、初めての体験で私も娘も足もかろやかです。最初にお目にかかれたのがコゲラでした。あいにく持参の双眼鏡では良く見えませんでした。愛護会の幹事さんの望遠鏡で見せていただきました。

コゲラは動きが早く、じっくりと眺めてはいただけませんが、その姿は感動的でした。ついでに本も見せていただき参考になりました。コガモ、マガモを含め11種の鳥たちに会うことができ、昔、田舎で遊びまわっていたことを思い出しました。

今回鳥の観察と共に感動したのは、道のそばに顔を出していたフキノトウ、フクジュソウ、ミズバショウの美しさでした。まだ少し雪の残る土から咲いている姿を見て、厳しい冬の間、じっとこの咲く日を待っていたんだと思うと自然の中の生命の偉大さに驚かされます。肉眼で見ても可愛らしいと思うのとレンズを通して見るのとは、また違った神秘さを感じました。

このウォッチングでは野鳥とともに草花もじっくり眺めることができ、今まで以上に自然が与えてくれる豊かさを強く感じました。

〒062 札幌市豊平区月寒西2条10丁目

〔記録された鳥〕カイツブリ、トビ、オオタカ、オシドリ、コガモ、マガモ、キンクロハジロ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ミソサザイ、ルリビタキ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、カワラヒワ、ニューナイスズメ、カケス、ハシブトガラス 以上27種

〔参加者〕齊藤正雄、藤井幸子、木下晴彦、墓田恵子、田中京子、出口福子、小野木弘司・幸子、西根昭吉・紀子、大西良夫、船野めぐみ、成田隼人、石井裕子、秦野千津子、蒲澤鉄太郎・則子、玉田義一・紀美子、今村三枝子、村田和幸・静穂、山田良造、目黒和子、後藤義民、亀田悦子・真志保、高栗 勇、吉田慶子・マツ子、成澤里美、戸津高保・以知子、栗林宏三、竹中昭雄・悦子、戸鼻 篤、松原寛直・綾子、照内 宏・律子、香川 稔、柳沢信雄、大槻日出、篠内道夫、早坂 隆、伊東裕二、井上公雄 以上48名

〔担当幹事〕井上公雄、栗林宏三

宮島沼の探鳥会に参加して

9. 4. 20 岡田 実

転勤で、11年半ぶりに東京から札幌に帰って来て2年近くになります。自宅が野幌森林公園に近いこともあって、東京時代から始めたバードウォッチングにかなり凝るようになりました。森林公園やウトナイ湖には度々出かけていたのですが、宮島沼には1度行ってみたいと思いつきながら、機会がありませんでした。

野鳥愛護会の井上公雄さんが探鳥会があることを教えて下さったうえ、当日、車で先導までして下さり、初めてマガンの群れに接することができました。

沼に近付くにつれ、マガンが隊列を組んで飛んで行く姿が目に入り、ワクワクしてきました。沼に着くと、すでに水面を埋めるようにマガンをはじめ、オナガガモ、キンクロハジロ、コハクチョウなどが羽を休めています。まるで飛行機が着陸するように、その後もどンドンマガンが集団で着水してきます。その姿は実に壮観でした。

この時期に宮城県伊豆沼などからシベリアに帰る途中に立ち寄るそうで、沼の表示板には35,000羽がやって来ていることを告げていました。明け方に沼を発って近くの水田や畑で餌を採り、午前中に一旦沼に帰って休んだ後、夕方再び飛び立つのだそうです。

しかし、参加者の方々の興味はマガンよりむしろ、シジュウカラガシ、カリガネ、ハクガンなどにあったようです。監視員の方の説明では、何万というマガンの群れの中に、それぞれ2羽とか3羽とかしかいないそうで、

みんなスコープを使いながら、宝探しのように目を凝らしています。私も皆さんのスコープをのぞかせてもらい、ほおとのどの白いシジュウカラガンを1羽確認できました。図鑑で見る限り、ほかのガンも相当数いるのかと思っていましたので、その希少価値に驚かされました。

沼ではカルガモも見ることができました。カルガモは東京では珍しくなく、大手町の三井物産本社の人口池では親に連れられたヒナの姿が春の風物詩のように毎年、新聞紙面をにぎわしていました。しかし、道内ではなぜかそれまで見る機会がありませんでした。

この日は、モズ、オオジュリン、ムクドリ、カワラヒワ、ヒシクイ、アオサギなども見ることができ、収穫の多い1日でした。風や雨の日にはマガンが沼に寄り付かないようで、天候に恵まれたことを感謝しています。

バードウォッチングをかじって3年余り。この日までに観察できた鳥の種類は119に上りました。うち、道内では83になりました。

〒004 札幌市厚別区厚別北3条5丁目7-3

[記録された鳥] カイツブリ、アオサギ、トビ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、シジュウカラガシ、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、ミコアイサ、ヒバリ、ハクセキレイ、モズ、ノビタキ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上26種

[参加者] 真壁スズ子、田辺英之、岡田実・江里、田中京子、樋口孝城・陽子、後藤義民、佐藤 勇、武内、柳沢信雄・千代子、犬飼 弘、小堀煌治、星子廉彰、中正憲信・弘子、村田静穂、蒲澤鉄太郎・則子、田辺至、清水朋子、坂井伍一・俊子、樋口和子、柴田一郎、佐藤幸典、山田良造、沢部 勝、戸津高保・以知子、森田新一郎、羽田恭子、板田孝弘、佐藤ひろみ、長谷川 稔、成澤里美、竹中昭雄、高栗 勇、沢田浩一、井上公雄 以上41名

[担当幹事] 山田良造、中正憲信

風がくれた贈り物

— 野幌森林公園 —

9. 5. 4 横井澄子

風の吹いている自然を生きいきと描いた童話「風の又三郎」どっどど どどうど どどうど どどう 青いくるみも吹きとばせ すっぱいかりんも吹きとばせ

そんな風が吹き荒れた5月4日、車がない、遊び相手もない、お金もない、ナイナイづくしのゴールデンウィークだったのが幸いして、突風の勢いによって始めて参加した探鳥会、双眼鏡ももたず、知り合い誰ひとりいない心細さなどすぐに吹き飛んで、森のとりこになっていま

した。驚いたことに森の中では木々はゆれ音はしても体には強い風があたらない、防風林を体感し自然の力強さを知りました。小鳥のさえずりだけで分かる人達やエンレイ草、アズキナ、エゾノリュウキンカ、スマレ春の野草との出会いをいっそう近づけてくれる解説や望遠鏡をセットしてウソの美しい色をカルガモ、オシドリの色鮮かさをじっくりと見せてくれた会員の皆が自然を愛し大切にしていることがよく伝わり感動しました。

美しいから、可愛いから好きのスタートですが仲間に入れて下さい。スケジュール表をカレンダーに書き込みながら浮き浮きとハイキング気分、会の主旨はもっと崇高なかも知れませんね……ゴメンナサイ。

森の最後はカラス、おでこで見分けハシブトカラスとのこと、何回読んでも途中で涙があふれ子供に読み聞かせながら感きわまって声にならなかった八島太郎「からすたろう」を思い出しました。

自然を愛する孤独な貧しい少年が、新任の理解ある先生に出会い学芸会でカラスのなき声を発表します。かえったばかりの あかちゃんからすや、不幸があったとき、うれしくてたのしいなきかたを次々みせてくれます。おしまいにふるい木にとまっているからすをまねて「カアウワァッ!カワウ ワァッ!」だれもがちびがすんでいるさみしいところをそうぞうすることができました。そこで先生は、ちびがなぜ できるようになったかを一日の出とともにいえをでて日ぼついえにかえりつき……みんなは、そのながいあいだどんなにつらくあたたかをおもいだしなきました……。

森と会との出会いによって見たい、聞きたい、感じた心の中にはっきりとわかる感動風が入りこみ居すわっています。青春のときめきにも劣らず。

〒004 札幌市厚別区厚別中央5条4丁目16-26

[記録された鳥] カイツブリ、トビ、オシドリ、コガモ、マガモ、カルガモ、キンクロハジロ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、ルリビタキ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、スンダイトシクイ、キクイタダキ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒラ、シメ、ウソ、ニュナイスズメ、カケス、ハシブトガラス 以上34種

[参加者] 蒲澤鉄太郎・則子、鋤柄吉保、沢田浩一、樋口孝城・陽子、佐藤信子、鈴木克司、太田アイ子、戸津高保・以知子、福間 恵、松嶋 誠、香川 稔、早川美恵子、渡辺智子、加藤 寛・恒子、沢部 勝、野坂英三、武沢和義・佐知子、柳沢信雄、森あかね、八木萃、鎌田玲子、船越昭則、後藤義民、横井澄子、大西典子、井上公雄 以上31名

[担当幹事] 井上公雄、後藤義民

中国におけるトキの保護事情の紹介

常 秀 雲

(中国陝西省野生動物資源管理工作station工程組)

現在、トキは世界でもっとも絶滅の恐れがある鳥である。過去には中国、日本、朝鮮及びロシアの東部に広く分布していた。1950年代以来、トキの生息環境の悪化により、個体数が急激に減少し、1960年の第12回国際鳥類保護会議においては国際保護鳥に指定された。その後、朝鮮、ロシアでは相次いで絶滅した。

日本では、その関わりのある機関が絶滅直前のトキを救うために、野外に生息するたった5羽のトキを全部捕獲して人工飼育を行ったが、現在では繁殖能力を失った1羽が残っているに過ぎない。

中国では、1960年代以来20年近くトキの姿が見られなく一時は絶滅と思われたが、1981年5月、中国科学院動物研究所の専門家は陝西省秦嶺洋県境内で調査中に7羽の野生のトキを確認した。そのニュースはただちに国内外に大きな反響を呼び、また国内政府機関の各関係部門と多くの国際野生動物保護組織においてより関心度も高まり、トキを救う事への望みとして中国に対する大きな期待が寄せられた。

1. トキ保護の成果

陝西省秦嶺洋県に再びトキが確認された事によって、中国が世界の中で唯一野生トキの分布する国となった。林業部はこれに対して関心を示し、省、県の各政府機関の林業主管部門はトキを救う事を重要なテーマにして来た。これまでの16年間に於いて国と地方は、トキ保護のために500万元(1元=12~15円)の全予算を投資している。また、日本などの国の長期的な国際協力によって著しく成果が得られたことにより、野外での正常な繁殖が回復し個体数も徐々に増加しつつある。その重要な成果については以下のとおりである。

1) トキの自然状態での繁殖が保証された。

16年間で、最初、たった一つの巣(姚家沟)の確認から、現在は8カ所にまで増加した(三益河、…以下地名略)。

現在のトキの総個体数は(飼育を含む)80羽までに達した。

2) トキの保護管理システムを設立した。

洋県のトキ保護観察センターがトキを救うための保護の最前線になった。当センターにはおよそ20名の研究員がいる。トキの営巣地に観察定点を設けて、トキが安全に繁殖時期を過ごせるなど、環境管理、天敵予防、病気

個体及び傷病個体の治療等において重要な役割を果たしている。また、通年と季節的な巡回組織は、トキの遊蕩期及び越冬期における個体変動の有効的監視に役立つほか、野生動物保護における宣伝(P.R.)にもつながっている。

トキ救護飼育センターは、野外での衰弱個体を救う場と人工飼育における研究の場として極めて重要な基地を担っている。

3) トキ生息地の生態と社会環境が改善された。

トキ生息地における動物の狩猟、樹木の伐採、農薬の使用が厳格に制限され、化学汚染が最低限度に押さえられた。

また、トキの繁殖、遊蕩、越冬の地域には人工給餌を行っており、さらに鳥類保護の知識及び法制教育の啓蒙普及を通じて、地域住民のトキ保護に対する認識が向上した。これらの生態と社会環境の改善は、トキの生存及び発展に重要な条件を導いた。

4) 科学的な研究成果が得られてきたことから国際交流も多くなった。

1981年以来、中国科学院動物研究所、陝西省動物研究所、陝西省野生動物管理センター、陝西省動物観察ステーション、西北大学、北京、上海動物園等では、相次いでトキの歴史と現状の分布調査、トキ繁殖生態、生息地の環境要因の観測及び分析、雛鳥の成長発育、発信機による追跡調査、寄生虫及び病気予防と治療など多方面に渡る研究が行われている。1987年からは生まれたトキにバンディングも開始された。

1992年以来、北京動物園、陝西省洋県トキ救護飼育センターにおいて人工繁殖、人工孵化が成功するなど、新しい研究成果の進展が見受けられる。これらの成果が世界のトキ研究の不透明であった点を明らかにしつつあると同時に、トキ保護における科学的なデータの提供に大きく貢献している。

2. 今後の課題

トキ保護の著しい成果が世に注目されたが、その種の絶滅の恐れが依然存在し、トキの生存と発展においては以下のような様々な課題もある。

1) 生息環境の悪化は根本的に改善されていない。

現在、営巣地以外のそれら営巣・ねぐらなどに適当となる大きな樹木が少ない。また、トキに提供できる冬の水田の面積も1950年代に比べて80%と減少し、游蕩区においては人為的な活動が瀬繁となったことなどから採餌場の水田はトキに対して非常に不利な状況となっている。

2) トキの行動範囲の拡大で保護管理に難度が増加した。

1988年以降の調査によると、トキの行動範囲は年々増加の傾向にあり、現在は洋県、城固、漢中、西郷、佛坪など6県と、市の山区、丘陵、平野の約3000平方キロメートルの範囲に及んでいる。これら地域の人口はほぼ百万人でトキの保護管理と地域住民の生活上での衝突も多く見受けられるなど、保護管理上において極めて難しい状況にある。

3) トキ生息数に危惧がある。

現存のトキの数が少ないため、近親交配の状況が避けられず、そのため、胚胎(はいたい)の発育が悪く、雛

鳥の早期死亡の発生も多い。幼鳥と亜成鳥がいろいろな悪環境に対する抵抗力も弱くなり生存率が低くなるなど、野外での個体数増加には時間がかかる。

4) 天敵及び悪天候の影響はトキ個体数増加への妨げ要因となる。

繁殖期において、蛇、イタチ科(?)の動物及び猛禽類等によるトキの卵・雛鳥への危害性が高く、トキの卵と幼鳥が天敵に食べられるなどの現象が時々見られる。

災害が起こるなどの悪天候や厳冬の低温による採餌場所の凍結、さらには夏期における干ばつや水域減少による採餌場所の消失など、トキの採餌確保の条件が困難となる一方、それら要因が関連してトキの個体数増加への影響が懸念される。

本文は中国語でしたので、日本語訳を

たぐきん総合研究所 調査部 張 裕平氏

富川 徹氏に

お願いしました。ありがとうございました(編集部)



【鶴川】平成9年8月24日(日)

9月7日(日)

8月に入ると早くもシギチドリ
の渡りは始まります。今年はど
んなシギチが見られるのでしょ
うか。それは夏羽のメダイチドリ、ダイ

ゼンであったり、オオソリハシシギであったり、予想外のことであったり行ってからのお楽しみというところ、とにかく鶴川へ行きましょう。

集合=9時30分 JR鶴川駅前

交通=道南バス(札幌駅前バスターミナル発8時浦河行き、鶴川農協前下車徒歩5分)

【宮島沼】平成9年10月12日(日)

春ばかりでなく秋にも南下の中継地として多くのマガンが羽を休めます。マガンばかりでなく多種類のカモ類がエクリプス(非繁殖羽)の成長と幼鳥が混在し識別に戸惑う時期でもあります。沼の一日を楽しみませんか。

集合=10時 大富会館前

交通=中央バス岩見沢駅前ターミナル発月形行き、大富農協前下車徒歩15分

【野幌森林公園】平成9年10月19日(日)

紅葉の彩りと落ち葉を踏みしめ歩む森は秋の匂いが漂っています。ルリビタキが現れたり、足元近くの側溝のミゾソバの実をついばむハシブトガラ、シジュウカラ等が至近距離で行動するのも秋です。春から夏へ爽やかな囀り可愛い姿で楽しませたアオジ、メジロもそろそろ終認の時期です。一年の思い出をめぐらせ、秋の季節感を存分に味わいながらの一日をお過ごし下さい。

集合=9時 大沢口駐車場入口

交通=夕鉄バス 新さっぽろ駅バスターミナル発「文京台西行き」大沢口公園下車、徒歩5分

【野幌森林公園を歩きましょう。】

平成9年9月14日(日) 10月5日(日)

集合=9時 大沢口駐車場入口。

☆いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行きます。

☆交通機関を利用される方は各自でお確かめ下さい。

☆昼食、筆記具、観察用具、雨具等ご持参下さい。

☆探鳥会の問い合わせは(011-851-6364)柳沢宅へ。

[北海道野鳥愛護会]年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付

☎(011)251-5465